九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# とりかへばや物語の世界

大原，一輝

https://doi.org/10.15017/12310

出版情報：語文研究. 13, pp.11-20, 1961-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

# とりかへばや物語の世界

大原一輝

## 一

平安朝後期より鎌倉期にかけての作り物語の世界には、何れも何らかの面に於いて新しい趣向を凝らし、以て源氏物語に昇華される王朝物語の世界に迫らんとする試みが見られる。とりかへばや物語もまたこの域を出るものではなかった。この物語に於いては、それが堤中納言物語的な世界をとることによって試みられてゐる。男女異装の姉弟を採り挙げて之を主人公とし、遂にはその本性が暴露されるに至って、所謂「とりかへ」が行はれるという事件を客観的に描き出してゐるこの物語は、その人物、事件に亘って確かに従来に見られない目新しさでもって注目をひかんとしてゐることは明らかである。この作者の態度は堤中納言物語に見られる「をかし」の立場に立つものであるといはねばならない。しかし、この物語には反面、源氏物語の世界を曳く「あはれ」の世界も色濃く見出せるものであるから、茲にこの二つの世界の消長を眺めて見ることは、そこに王朝物語の末期的世界が示してゐる一つの様相を見出すことになりはしないかと思ふのである。

## 二

現存するとりかへばや物語は、所謂古とりかへばや物語の世界に比する時、勉めて現実的な世界を描き出そうとしてゐることは明らかである。即ち、無名草子に拠れば、現存とりかへばや物語は、古とりかへばや物語の改作であることが述べられてゐるが、その古とりかへばや物語については、極めて不自然な非現実的要素が多分に存在してゐた事が指摘されてゐる。例へば、女主人公の髻ゆるがして子を産む「いみじげ」なる状を始めとして、「夥しく恐ろしけれ」と言はれてゐるその蘇生、「まことしからぬ事どものいと恐ろし」き鏡の影による透視等、要するに「物恐ろしくおびただしきけしたるもののさま」が、おどろおどろしく描かれてゐた様である。従って、この「いみじ」、「恐ろし」、「まことしからぬ」、「物恐ろし」等といはれてゐる古とりかへばや物語は、多分に現実離れのした世界の描かれた物語であった事は容易に窺はれる所である。之に対して、その改作といはれてゐる現存とりかへばや物語につ

いては、「など唯今聞えつる『今とりかへばや』などの本にまさり侍るさまよ。何事も物まねびは必ずもとには劣るわざなるを、これはいとにくからずをかしくこそあめれな」と先づ改作の巧みさそのものが好評を博してゐる。次いで、「夥しく恐ろしき所などもなかめり」といひ、男女主人公の有様についても、夫々「いとよく」、「うたてけしからぬ筋にはおぼえず」、「いとほし」、「いとよし」等と批評されてゐる。また男女互に元の人になり替る筋も「いとよく」と述べられてゐる等、「もとの人々皆失せて、いづこなりしともなくて、あたらしう出で来」る事もない「今とりかへばや」には、茲に「古とりかへばや」の持つ非現実的不自然不合理な点を排除し、物語の筋はあらかた之に準拠したものではあろうが、極めて現実的な基盤に刮って之を展敍せんとしてゐる態度が強く認められるのである。

従ってこの物語には人物、環境、事件に亘ってその現実性を指摘し得る事は、極めて容易である。例へば、先づ物語の冒頭では、その主人公が、「権大納言にて大将かけ給へる人」の子女であることが述べられてゐる。之は、かの月の都の人であった竹取物語のかぐや姫や、仙境に成育した宇津保物語の仲忠の生立ち等に比すれば、遙かに卑近な現実的階層の人物を採り挙げてゐるものである。しかも、その主人公達の男女異装については、この物語の特異性を最もよく印象づけてゐるものではあるが、之も決して全く現実離れをしたものではない。即ち、平家物語にも見られる「水干に立烏帽子、白鞘巻をさいて、舞ひければ、男舞とぞ申ける」（同書巻一）といふ白拍子に窺はれる女性の男装や、随所に見られる女性化した公達の容貌服装等、一般に「当時の風俗、貴族は男子も白粉臙脂を装ひ、翠黛鮮かに、鉄漿黒々と冠は塗桶の如」く、「優美の境を超えて怪醜に傾」かんばかりの奇態を示した時代（藤岡作太郎氏「国文学全史平安朝編」）であったから、この物語に於ける男女異装の如きも、素材としては目新しいとはいへ矢張り院政期に於ける世相風俗を反映してゐるものとして、現実性が容易に認められる所である。従って、人々が女君を「姫君と聞えしは、ひがごとなりけり」と思ひ、「唯若君とのみ思ひ」なるが如きことも起り得たに違ひない。またこの物語には、予言や夢兆が見られる。例へば、女主人公に対して「遂にはおもひのごと、かみをきはめ給ふべきちぎりいと高く物し給ふなり」、或ひは「こくものくらゐに極め給ふべきさうおはせし人なり」といひ、男主人公に対しても「これぞ我がむすめに縁ある人に物し給ふめり」と見給ふ吉野の宮の相人的な予言や、父大臣に対して、男女の異装を天狗の祟であるとして「いささかの物の報なり」とその宿世の程を伝へる僧の夢兆等である。しかも物語の進展は、この予言や夢兆にそってなされてゐるのであるから、之が物語に於いて果たしてゐる役割は大きいものといはなければならない。しかし、之もすでに源氏物語や浜松中納言物語等の物語類を始め、更級日記にも頻繁に見られた所である。今鏡にも、例へば後三条院が「人の相よくする」者の奏請によって即位されたことや、崩御に当っては「異国のそこなはれたるを直さむとて、この国をば去らせ給へる」と人の夢に見えたることが記されてゐる（同書すべらぎの中）。従って此処に語られてゐる予言や夢兆の如きものも決して非現実的なものとしてではなく、当時の人々にとってはむしろ事実で

さへあったものが扱はれてゐるに過ぎないのである。また環境について見ると、この物語には、自然描写に極めて乏しい反面、その描かれてゐる限りに於いては矢張りその世界を現実的たらしめようとしてゐる。即ち、中には吉野の宮の渡唐譚の如きも見られはするが、それは飽くまでも主人公の活躍場面としてではない。物語は、京・宇治・吉野に舞台を設定してゐるのであって、之も物語の世界に現実性を持たせようとする意図の現はれであるといはねばならない。さうして物語は、更にこの様な現実的世界の中に男女主人公の陥ってゆく不幸なる事件、就中男装の女主人公が、宮の宰相によってその妻四君を奪はれるといふ四君事件を始め、剰へ自己の本性が暴露される事件、また遂には我が子とも離別して吉野に逃れ入り、そこで所謂「とりかへ」が行はれるといふ何れも極めて地上的現実的な事件を描いてゐる。茲にこの物語には、人物、環境、事件に亘って現実的な世界が濃厚に描き出されてゐるといへるのである。

次にこの様な現実的な世界に対する作者の態度について見ると、極めて知的客観的な冷やかなものが認められる。例へば、之を構成面について見ると、男女主人公の「とりかへ」といふこの物語の中心的な事件は、その服装のみならず「みちやうの内にのみうづもれ入」る若君と、「をさをさ内にも物し給はぬ」姫君という全く対照的な性格の二人の間に行はれるものであるにも拘らず、元来「とりもたがへつべう」見える容貌の相似によって、極めて容易に且つ自然にとり行はれるのである。そこには「古とりかへばや」の如く蘇生といふ非現実的な手段によらざる現実的な解決が既に伏線的に準備されてゐたといへよう。しかもその「とりかへ」は、四君事件以下の女主人公に迫る危機を漸層的に積重ねることによって、その当来が必然化されて来てゐるのであるからこの構想に於いても作者の計画的な知的態度が窺はれるのである。また「とりかへ」の前後に於ける夫々の人物関係について見ると、前半に於ける女主人公と四君・宮の宰相・麗景殿の女・吉野の女君等との関係、男主人公と女春宮との関係は、後半に至って夫々男女主人公を入れ替へた関係に於いて始めて自然化されて来てゐる。此処にも「とりかへ」を中心とした前後二つの世界を対照的構成的に示さんとする余り、遊戯的飜弄的な迄の態度さへ見られる。従ってこの様な知的客観的な態度を示している作者は、物語の女主人公に対しても次々に不幸の渦中に陥れるのみならず、遂にはかの「いと暑き日」の場面に見られる如く、その本性を暴露させずには置かないといふ極めて冷やかな客観的態度を採ってゐるのである。かくて物語の世界に対する作者の態度には、構成面に於ける対照的な人物や人物関係、或は漸層的な事件の堆積等の巧みな配置設定に於いて知的であるのみならず、かやうに対象を一歩の隔りをもって客観的に冷やかな突き放した状態に於いて扱い眺めようとする態度が強く認められる。之は「をかし」の立場に立つ態度であるといはねばならない。しかもその対象の最も中心とされてゐるものは異装の姉弟就中男装の女主人公であることはいふまでもない。

しかし之が「とりかへ」後の後半に移ると、次には宮の宰相達にその対象を見出して来てゐるのであるから、之は結局物語全般を通してとられようとしてゐる態度であるといへるのである。即ち後半

では、女主人公を見失った宮の宰相の狼狽振りに対して「かげにつきて窺ひありき給ふもをかしくおぼして」、「さ思ふよとをかしくて」といひ、四君の歎きに「をかしくもことわりにおぼ」え、麗景殿の女に「同じ心なりけるもをかしうて」等と男主人公に言はせてゐるのであるから、そこには「とりかへ」に気付かざる人々、就中宮の宰相に対する明らかな嘲笑的批判的態度が見られるのである。

茲にこの「をかし」の立場に立って対象を眺める態度が物語を一貫してとられてゐるものといはねばならない。さうしてかやうにこの物語が、現実的な世界をリアルに扱って、有機的知的な構成の下に「をかし」の世界を見せてゐる点では、かの堤中納言物語の世界に極めて強い親近性が認められる。即ちその対象の世界を「をかし」の側からとり挙げ眺めようとする態度の強く認められる堤中納言物語中の諸篇、就中「花桜折る少将」、「思はぬ方にとまりする少将」に於ける人達へや、「虫めづる姫君」に於ける特異な性格の主人公のとり挙げ方には著しい類似性が認められることはいふまでもない。そこに準備された対照的な人物の姿態や称呼上の紛らはしさ等に因って引起される予想外の事件の描写や変態的人物に対する好奇的暴露的な客観的批判的な態度等は何れも、この物語の構成や作者の態度趣向に通ずるものが認められる。要するに「古とりかへばや」の改作に当って、その非現実的な世界に対して否定的な立場に立たうとした「今とりかへばや」は、勉めて現実的な世界を描かんとして居り、しかもその世界に対しては知的客観的な冷やかな態度を示して、その趣向の根底には堤中納言物語的な「をかし」の世界が見出せるのである。

## 三

とりかへばや物語の作者には、その対象を冷やかに突き放した態度が強く認められる。しかし作者はその様な態度に全く徹し切ってしまってゐるのではない。その反面には浪漫的理想的世界に心惹かれる態度も強く認められるのである。即ち作者は非現実的な世界を排除せんとしたとはいへ、決して現実的な世界を冷徹に描くことにのみ終始してゐるのではない。例へば、先づ之を人物について見ると、異装の主人公を描くに当ってもその才色の人並みならぬ状に理想化の傾向が示されて来てゐる。女主人公については「絵に書きたるやうにて」、「絵に書くとも筆及ぶべくもあらず」といふに留まらず、「只今極楽のむかへありて雲の興よせたりとも、猶とどまりて見まほしき御ありさま」といふその姿態美は、「天女の天降りたらむも麗しうことごとしかりぬべ」き男主人公の姿態美と共に、多分に美化理想化されたものとして描き出されてゐる。また女主人公の詩歌管絃の才についても「まことに斧の柄も朽ちぬべく、故郷忘れぬべし」といひ、「へんぐゑ出でたる人にこそあめれ」と讃美されてゐる。また宮仕へに出ては、侍従から右大将に至るまでその官位の昇進に於いても目覚ましいものがあり、かくては人々から「見るごとに心けさうせら」れ、「ひとめも見る人の聞えごちかく」るも至当であったといはねばならない。この様な人物の容貌、才芸、地位、興望等に於ける非凡化には、多分に修辞的類型的なものが認められはするものの、その根底には矢張り現実的通俗的なものを離れて、対象を理想化憧憬化せんとする心情が秘められてゐることを認

めねばならない。この様な傾向は、先の現実的な傾向とは全く対照的な態度を示すものであって、之は更に次に見られる如き先行物語の世界に拠りかゝってゐる態度に於いて一層明確になって来るのである。例へば、男主人公の姿態美を「いにしへのかぐや姫も、げにかくめでたきかたは、かくしもやあらざりけむ」と極言し、吉野の女君の琴を賞でては、「なにがしの大将の笛の音にめでゝおりくだりけむ天つ少女も、耳とゞめつべかめるに」といふ所には、竹取物語や狭衣物語に於ける天上思慕の理想がそのまゝ想起継承されてゐることはいふまでもない。作者は出来るだけ之等の物語の世界に己が物語の世界を近着けようとしてゐるのである。このことはまた「そのことゝ思ふならねど月見ればいつまでとのみ物ぞ悲しき」（女主人公）、「見しまゝにありしそれとも覚えぬは我が身やあらぬ人やかはれる」（四君）、「春の夜も見る我からの月なればこゝろづくしのかげとなりけり」（四君）、「雲のうへも月の光もかはらぬに我が身ひとつぞありしにもあらぬ」（女主人公）等の詠歎的追懐的心情が吐露されてゐる一聯の「月」の歌に於いても、それが竹取物語や伊勢物語に於ける詠歎的抒情的世界に拠ってゐることによっても認められる。その他現実的事件に於いてさへ源氏物語を始めとする先行物語の世界との関聯性は数多く指摘され得るのであるが、此処では特にこの傾向の強い物語後半の世界を採り挙げて見たい。例へば、女主人公を四君事件、本性の暴露、我が子との離別、「とりかへ」と執拗にいためつけ、陥れて之を冷やかに客観視する態度を示して来た作者は、結末に至って之を入内させ、男主人公は関白に即かせ、夫々一族の繁栄の状を描いて来てゐる。之はいはば「とりかへ」の後日譚的な世界であるが。此処に作者は理想的境地に於ける事件の解決を示して来てゐるのである。中宮といひ関白といへば、矢張り当時の人々にとっては最高の地位であり、憧憬的な地位であったに違ひない。之は竹取物語に於けるかぐや姫の昇天には遙かに及ばぬまでも、矢張りそこには一つの作者の理想的世界への憧れが示されてゐるものであるといへよう。作者はせめて此処に女主人公を救ひとらうとしてゐるのである。またこの結末に至る前提としての所謂「とりかへ」は吉野の地に於いて行はれてゐるのであるが、それは飽くまで現実的解決の場として描かれてゐる所である。しかるにこの現実的な場としての吉野についても、環境描写に於いては「水のながれ岩のたゝずまひも、都にてはすべて目馴れぬさまにて、ものおもひも慰め、かつは心ゆきぬべき御住ひなる」といふは、そのまゝかの源氏物語の中で明石や宇治を紹介する場面（若紫、橋姫）に通ずる雰囲気が認められる。のみならず超俗的な宮の有様と、その渡唐譚を背景とする姉妹との物語には、異国情緒に彩られた極めて浪漫的な世界が示されて来てゐる。作者は主人公達をこの様な世界に導入することによってその不幸なる事件の解消を計ってゐるのである。しかも結末では、吉野の大君が男主人公と結ばれるのみならず、宮の宰相に対してさへ中君が興へられてゐる。従ってこの「とりかへ」後半には、そこに「右大将（男主人公）と中納言（宮の宰相）とはすなはち十帖の薫大将と匂宮とにして、吉野宮は勿論宇治の八宮に当り、しかも浜松中納言の吉野の尼君と極めて相似たり」（「国文学全史平安朝編」）といふ異郷憧憬的な浜松中納言物語や源氏物語、就中超俗的な宇治の世界が大きく

とり入れられてゐることは明らかである。要するに作者は「をかし」の世界に於いて冷やかにその対象としてゐた人物や事件を最後には理想的な境地に於いて救ひとり、めでたく結末をつけようとしてゐるのであって、そこには先行物語の世界に拠りかゝってゆかんとする態度が強く見出せるのである。茲に現実的世界の直写のみに留まり得ずして、その美化理想化を計ってゐる態度の究極は実に之等の先行物語の世界への憧憬に他ならなかったのである。しかもその間に多くの模倣類似点の容易に指摘される事は一に作者の創造的力量の不足を示してゐるものであるとはいへ、矢張りその理想的浪漫的世界への強い憧憬的態度は否定し難い。さうしてこの態度はまたそれ等の物語が持ってゐる「あはれ」の世界への志向態度を示してゐるものに他ならないのである。

かくて先行物語の世界への憧憬によって窺はれる作者の「あはれ」の世界への志向態度は、先に「をかし」の対象として見られて来てゐた女主人公の上に最も強く認められる。女主人公は、結末に於いて本性に還り入内することによって異装者としての苦悩はめでたく解消されて来てゐる。しかしそれにも拘らずそこでは「おなじ巣にかへるとならばたづの子のなどて雲居のよそになりけむ」と詠まれて、互に母子名乗り得ぬ再会した我が子への詠歎的悲哀が強く「あはれ」を印象づけてゐるのである。しかもその歎きには「世づかぬ」宿世として煩悶し続けて来た男装時代の歎きが因果的に継承され流れ来ってゐるものであれば、そこにこの女主人公の「あはれ」が物語を強く貫流してゐることを知り得るのである。即ち「やうやう人の有様を見聞き知りはて、物思ひしらるゝまゝ」に「人に違ひける身」を悟り始めた女主人公は、梅壺女御参内の有様を垣間見ては、「あはれ我もよのつねの身をも心をももてたらましかば」といひ、男主人公の「世になくめでた」き女姿に向っても「あはれ我もとよりかやうにてあるべきものを」と折にふれ所につけて我が身の宿世の程が絶えず歎かれてゐる。この心からは「よづかぬ身のうつしざま」にて「かゝるたがひめ」の出で来った四君事件に対してさへ「それを恨むべき故ある身かは」と先づ我が身の不幸を歎く心が先立つてゐる。従って、四君に生まれた若君にも「我が身のよづかぬをこたり」を見出すと共に此処でも、「あやしの我が身の有様」が一段と歎かれてゐる。之は他人の犯せる罪によって強く我が身の宿世を悟ってゐるのであるから、かの女三宮事件に於ける光源氏の心境に通ずるものともいへよう。次いで女主人公は宮の宰相によって遂に「我が身のうさ」を見あらはされるのであるが、此処でも先づ「さるべき契」ならんといふ吉野の宮の言葉が今更の如く想ひ出されて「世づかぬ身のゆかり、我も人（四君）も世の乱れあるべき」を思へばあながち宮の宰相一人も責められないでゐるのである。さうしてこの自己の宿世への強い歎きからは「やがて深き山に跡も絶えなまほし」く、「見えぬ山路尋ねまほし」き現世逃避の決意も次第に強まって来るのである。しかし、「世にはあらであらばや」と思ふ心は深まり乍ら「殿うへのおぼさむ所」を憚り、「いかばかりの御おもひならむ」、「何事かおはしますらむと覚束な」き両親への愛着と、「うき世のほだしつよき心地」される我が子への愛情に惹かれながら、遂にたゞ「後の世をだに思はむ」とて単身吉野への遁世を決行するに至ってゐる。従って結末に於ける女主人公

の歎きには、ひたすらなる「世に似ぬ」我が身の宿世への歎きはもとより、それに基づく逃避的厭世観とそれが現世的な肉親的愛情との錯綜葛藤の下に深い懊悩として流れ来ってゐるものであるといへよう。茲に女主人公の姿に一貫した「あはれ」の世界が強く見出されて来るのである。

女主人公の身の上に見られる「あはれ」はまた各所に於いて詠まれてゐるその独吟の和歌に於いて之が一層よく傍證され得る。即ち「世づかざりけ」る、我が身の上を知ればこそ、宮の宰相に対しても「たぐひなき身を思ひしるからにさやは涙のうきてながるゝ」と心中秘かに「ひとりごた」れるのを始めとして、梅壺女御の参内姿に接しても「月ならばかくてすままし雲のうへをあはれいかなる契なるらむ」と宿世の程が歎かれて来る。また吉野に宮を訪ねても「涙しもさきに立つこそあやしけれそむくたびにもあらぬ山路を」と現世への執着の断ち難さに苦悩を見せ、本性の暴露によって宇治に身を潜めても見るもの聞くものにつけ「しぐれするゆふべの空の気色にも劣らずぬるゝ我がたもとかな」、「思ひきや身を宇治川にすむ月のあるかなきかの影を見むとは」とひとりごたれ、本性に還って尚侍として参内の折の「雲のうへも月の光もかはらぬに」の歌（上掲）等には宮の宰相に我が身を委ねるに至った宿世や男装時代の回想に一層数奇な宿世を歎き続けてゐる姿が認められる。さうして宇治で別れた我が子を想ひ起しては「物をのみひとかたならず思ふにもうきはこの世のちぎりなりけり」、「ひたぶるに思ひ出でじと思ふ世にわすれがたみのなにのこりけむ」と御心の中に思ひ、「おなじ巣にかへるとならば」（上掲）といみじう泣かれるのである。

この物語には和歌がすべて八四首あり他の物語に比しても遜色なく、抒情的色彩を加へてゐるものであるが、その中独吟歌一三首中で敍上の如き女主人公の九首が最も多数を占めてゐる。蓋し独吟の歌には個性や感情の吐露が題詠歌や贈答歌等に比して最も虚飾なく示されてゐるものであるといへるならば、之等の数多き独吟歌にこそ女主人公の我が身に対する「歎き」が物語を一貫してゐるものとして強く認められるのであり、従ってそこに最もよく「あはれ」の世界が示されてゐるものであるといへるであらう。

## 四

とりかへばや物語は「をかし」の世界を基底として物語を描き出さうとしてゐる。しかし反面、その対象とされてゐる女主人公には却て「あはれ」の世界が強く見出せる。そこで次にこの物語の「あはれ」の世界を物語中に用ゐられてゐる「あはれ」の語に則して眺めて見ると、その使用概数は一八六の多きに達して居り、之は「をかし」の概数六五に対して三倍に近い多数である。之をその使用されてゐる対象に従って分類して見ると、人事関係のもの一八一例が自然に対するもの五例より圧倒的に多い。之は矢張りこの物語が人物事件を中心として所謂筋の進展に力点を置いてゐるものであることを示してゐるものである。更に之を使用されてゐる主要人物別に見ると、女主人公に用ゐられてゐるもの七六例、次いで宮の宰相二七例、男主人公一九例、四君一八例の順になってゐる。此処でも女主人公に「あはれ」が圧倒的に多く見出され、最もあはれなる人物、

あはれ知る人物として描かれてゐることが端的に窺はれるものである。次に「あはれ」の語をその意義上より分類すれば、悲哀、情趣、愛情等もとより一様ではない。しかしこの中で最も根源的な意味を持つ悲哀詠歎を示すものは感動詞としての「あはれ」に他ならない。所でこの種の「あはれ」も一一例中五例迄が女主人公について見出し得て最多数であり、矢張り他に比して何よりも自己の宿世に対する悲しみに絶えず沈潜する姿を示してゐるものといへよう。また自然を対象とする「あはれ」が極めて少いことはその使用数上からも明白であるが、しかもその少数の「あはれ」が特に吉野について目立って見られることは矢張りそこに宇治十帖的な世界を雰囲気に於いても描き出さんとしてゐるものである。例へは「山の気色もあはれなるに」、「（虫の声、水の流れ、風の音、鹿の音など）哀を添へ」と述べ、「あはれなりし事、おもしろかりし花紅葉」の吉野の山里を姫君達に回想させてゐる等、何れも吉野の地に「あはれ」の世界を示さんとしてゐるものであるから之もそこに逃避せんとする女主人公の「あはれ」の世界を彩る一助となってゐる。次に之等の自己自身に対する感動詞的な「あはれ」や自然環境に於ける情趣的な「あはれ」に対して注目されるのは「あはれになつかしくうち語らひ」、「あはれに心細く覚えて」、「嬉しくあはれにもおぼす」等の主として心情語と結びついた対人関係に見出せる「あはれ」である。試みに之を女主人公についてその対象の明確な主要人物別に採り出して見ると、四君に対するもの一六例、宇治で離別した若君に対するもの八例、宮の宰相に対するもの七例、男主人公に対するもの四例、吉野の大君に対するもの三例、父大臣に対するもの二例、その他四例、計四四例で女主人公に用ゐられてゐる「あはれ」の過半数を占めてゐる。しかも之には父大臣、若君、男主人公等に対する親子姉弟間の肉親的愛情や同情を意味するものが多く注目されるほか、四君や大君に対する異性的愛情を示すものも少くない。また「さし放ちがたう哀れなれば」といふ如き男装時代に於ける宮の宰相への友情等も見られ、その対象は様々な人々に亘ってゐることが知られる。之に対して他の人々が主体となってゐるこの種の「あはれ」について見ると、例へば男主人公が「哀になつかしく」見、吉野の大君が「あはれに心細く覚」え、若君が「いとあはれとおぼ」す等何れも女主人公をその対象としてゐるものが目立って居り、女主人公が之等の人々に対してそゝぐ愛情と相俟って従来この物語に於ける「愛情」が注目されて来てゐる所以も明らかに見出し得るのである。従って此の点でも矢張り女主人公が「あはれ」の中心に置かれてゐるといへるのである。しかもかゝる女主人公の対人的「あはれ」には何れも明かし得ぬ「世づかぬ」宿世を持った我が身への悲歎がその根底に強く秘められてゐるものであることはいふまでもない。またこの対人的関係に見られる「あはれ」の中には契の深さを意味するものがある。例へば、「ちぎりのあはれならぬにもあらぬ」の如く女主人公と宮の宰相との仲らひや、「あはれなりけるはらからの御契」といふ異装の姉弟の契の深さを意味するものは、それが少数ながらこの物語に於いては重要な人物関係を示すものであって、此処でもその宿世的悲哀感は尚更強く示されてゐるものである。茲に以上の如き「あはれ」の意義用法上から見ても、単にその量的面に於けるのみならず、その対象としても女主人

公の上に強く「あはれ」の世界が認められるのであり、その根底をなす宿世的悲哀感こそこの物語の「あはれ」の世界の基調をなしてゐるものといへるであらう。

かくて「をかし」の世界を示さうとしたこの物語の中にあって「あはれ」の世界は、それが女主人公の悲哀を根幹として強く流れてゐることが認められるのであるが、終始之が一面に於いてその基調とされようとした「をかし」に拮抗し得てゐたかと言へば必ずしもさうではなかった。即ち「あはれ」が「あはれ」として必ずしも終始その自己の世界を強く主張し得られてゐたのではない。そこに「あはれ」の世界の「をかし」の世界に対する消長が見出されて来るのである。この一つの世界に徹し得てゐない態度は、作者が先に見られた如き現実的堤中納言物語的世界と理想的源氏物語的世界といふ二つの対照的な世界に跨がった態度を採ってゐる以上この物語そのものに負はされた一つの宿命でもあった。即ち作者が最も現実的客観的な態度で採り上げようとした「とりかへ」事件も結末に於いては、親子の情愛の悲歎にくれる女主人公の「あはれ」が前半に於ける異装時代からの悲哀を継承強化してゐるものであることによって一層強く印象づけられて来てゐる。また後半女主人公への執心が本来「をかし」の対象として強調さるべき宮の宰相に対しても、之を「おもひあはする方だになくて止みにし宇治の川浪は袖にかゝらぬ時のまな」く、「うくもつらくもこひしくも、ひとかたならずかなしとや」といふ結びを以て、結局宇治十帖的な抒情的詠歎的な世界の中に包みとらうとする態度さへ認められる。それは「をかし」の世界を「あはれ」の世界が浸透し、凌駕、包摂せんとする姿を示しているものである。しかし反面この様に「とりかへ」以後結末に至って濃厚になって来てゐる「あはれ」の世界も、その前半男女の異装時代について見る時、矢張りそこには「あはれ」も「をかし」の下に見られてゐたことを認めねばならない。例へば、男装の女主人公と四君・大君との人物関係には愛情の「あはれ」が多数見受けられ、また麗景殿の女との間には恋愛的雰囲気が描き出されてゐる。しかしその実そこには異装者の同性に対する関係がまことしやかに描かれてゐるものに過ぎない。従ってそこに見られる異性的愛情の「あはれ」の如きは、結末に示された「あはれ」や肉親的愛情の「あはれ」とは明らかに世界を異にするものであり、異った立場から描かれてゐるものである。いはゞそこに見出される愛情は、女装の男主人公と女春宮との関係に於けると同様、全く好奇的な対象としてのみ眺められてゐるものに過ぎない。従ってこの「あはれ」は明らかに「をかし」の側から眺められてゐるものといふべく、そこには矢張り「をかし」の「あはれ」に対する優位を認めねばならない。結末に至って強められて来てゐる「あはれ」の世界も、前半に於いては「をかし」に圧倒されてゐたのである。茲に二つの世界は互に自己の世界を主張し、凌駕し合ってゐる様相が認められるのである。

要するに、とりかへばや物語には現実的世界に対する冷やかな客観的態度と、理想的世界に対する憧憬的態度が認められ、引いてはそれが「をかし」「あはれ」の対照的な二つの世界として示されて来てゐる。しかもこの二つの世界に対してその何れにも終始した徹底さを見せないまゝに錯綜した状態を呈して来てゐることは、そこに作者がその何れの側に立たんかとする昏迷煩悶の姿のあらはれが

見出せるものに他ならない。しかし結局作者はその主眼とした「とりかへ」事件そのもので結末づけずに、後日譚的後半を添加せずには居れないでゐる所に「をかし」の世界を基底として物語を進め出し乍ら「あはれ」の世界に心惹かれざるを得なかったことが窺はれるのである。換言すれば、それはこの物語が「をかし」の物語としての堤中納言物語的な短篇的世界を骨格とするものであり乍ら短篇物語としては終らされてゐないといふ点によっても明らかである。即ち物語の長さに於いては源氏物語や狭衣物語にはもとより及ばずながら、竹取、落窪、浜松中納言物語に比して長篇であるこの物語は決して堤中納言物語の各篇に見られるが如き短篇物語として終ってはゐない。しかも内容に於いても、主人公の生立ちより始めてその後日譚を加へ「おほよそ三四十年ばかりのこと」を「みかどは三代にわた」って記し（岡本保孝「取替ばや物語考年立」）てゐるのである。従って根底に於いては、たとへ堤中納言物語の世界に通ずるものがあるとしても、かゝる長篇性を具備する以上、その潤飾に当っては矢張り源氏物語を頂点とする長篇物語の持つ伝統的な「あはれ」の世界を脱却し得なかったものといへよう。茲に新しい「をかし」の世界を企図しながら徹し得なかったこの物語に於ける「あはれ」の意義が見出されて来ると思ふのである。

付記　引用文は「国文大観」所収とりかへばや物語に拠った。

本稿は岡山大学教授森岡常夫博士の御懇切なる御指導を頂いた。記して謝意を表します。

## ○西日本国語国文学会翻刻双書刊行会より

すでに「誹諧旅枕」（第一回）の配本を終えましたが、以下、「原撰本新撰万葉集・歌合二種」「幼童抄・〔連歌作法書〕・和訓押韻」「寛永廿一年俳諧集」「平安期私家集」「狐媚倭字抄」「中世和歌集」「上方洒落本集」の順に続刊予定です。入会御希望の方は、現在若干の余裕がありますので、お早めに左記要領でお申し込み下さい。

一、刊行方法　年四回配本。第一回は本年八月

二、会　費　一冊約三五〇円。刊行毎に金額を明記徴収させて頂きます。

三、入会申込　左記宛入会金三五〇円を添えて申し込んで下さい。入会金は最終回配本費用に充てます。

福岡市箱崎九州大学文学部国語学国文学研究室内
西日本国語国文学会翻刻双書刊行会
（振替福岡一五〇九二番）